



終りの旅
瀬戸内晴美



終りの旅 昭和四十九年四月二五日 初版第一刷発行

著者——瀬戸内晴美 装幀——杉浦康平・海保透

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社 平凡社 東京都千代田区四番町四番地一

郵便番号 一〇二 振替・東京二九六三九

電話 東京(〇三)二六五—〇四五—(大代表)

印刷——星野精版印刷株式会社 製本——株式会社石津製本所

©瀬戸内晴美 一九七四

不良本のお取替えは直接小社サービス課まで(送料は小社負担)

目次

夢の中で…………… 1

地図を往く…………… 15

鐘の鳴る町…………… 27

軌跡…………… 41

岬へ…………… 55

幻の水の街…………… 73



海への道……………89

蒼い真珠——トレド……………105

朝市の占い師……………121

旅の終り……………135

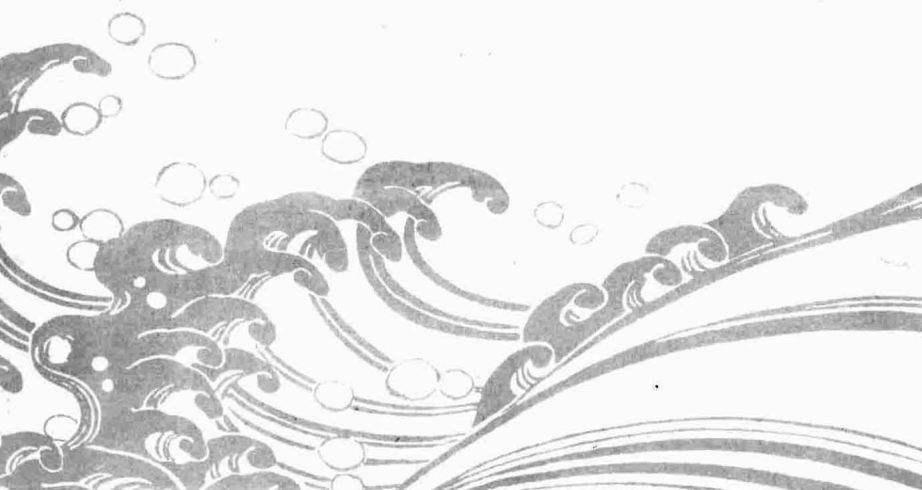
ロマンティック街道……………151

ふるさとの風……………167

幽会……………183

ルルドのマリア……………211

夢の中で



夢で旅をしていることがある。

不思議なことに夢の中で見る風景は、どここの町、何という山や川といえないような、見たことも行ったことも覚えのないものが浮んでいる。それでいて、夢の中では、自分はどこを歩いているとわかっているらしく、何の不安もなく行動しているからおもしろい。

夢の中で私はよく海辺に立っている。

覚めている時、私は海より山の方が好きだと考えているのだ。疲れて、どこかへ心身を休ませに行こうと思う時は、迷いなく山の方が心に浮んでくる。樹々の鬱蒼とした茂りの厚みや、陽光にきらめく雑草の葉先の風とのたわむれや、なだらかな近い丘の背や、遠い山の背の招きなど、何にもまして、山峡の底に流れている清冽な溪川の冷たさ、そういった山の風物のすべてが私をさし招き、憧れを呼びさます。私は山懷に抱かれて、澄んだ汚れない空気を細胞のすみずみまで吸いためたいとねがう。

それでいて、夢にあらわれてくるのは海辺の風景だというのはどうしてなのだろう。

私の故郷は山も川も海も揃っていて、私は子供の頃、山をかけまわって遊んだ

り、河口の港へ入ってきたり出ていたりする大阪通いの連絡船を終日眺めて暮したりした。山はすぐ私を抱きとってくれたが、海はいつでも川の向うにあって、未知の憧れであった。

覚めている時、山を恋うのは、なつかしい恋人の腕に身をゆだねたいとねがう甘えであって、夢で海辺に立つのは、未知の恋への憧れのあらわれなのであろうか。

けれども私の夢の中の海辺は陽光に輝き、ヨットが浮び、ビーチパラソルに彩られ人々が群れているような明るい夏の海ではないようだ。

夢の海辺はいつも荒涼としていて、黄昏だか夜明け前だかわからない模糊とした薄明につつまれている。海は青くはなく、灰色だったり、薄いベージュだったりする。波頭は白い牙のようにむきだされ海を噛んでいる。空も、海と同じように昏くよどんで重々しく拡がっている。

砂浜には人影は全くなく、死んだ貝や、打ち上げられた海藻にしがみつかれている朽ちかけた廃船が横たわり、その影にはおびただしい腐った貝の山がある。

どこかで、不気味な鳥が哭き、その姿は見えない。遠い岬の端に、外国の城のような石の建物が見える。松林の樹々はどれもみなうなだれ、泣いているように見える。そして、特に、空と海には黒い虹がかけ渡されている。そんな夢から覚めた時、私はいつでも軀が冷たくひえているのに、心は妙に熱っぽくむれているのに気づく。

夢が心の奥底のものをひきだしているとすれば、あの昏い海辺の光景は私にとっては何なのだろう。

私の記憶にない查い昔、もしかしたら、生れてくる以前の世界で、ああいう海辺に立っていたことがあるのだろうか。それともいつか訪れる死後の世界のあれは予兆の世界なのだろうか。今はもう、その荒涼とした光景は、むしろ私にはなつかしくさえなっていて、海辺の風景が夢に訪れた朝は、私はいつもより深い眠りを得た後のように頭が冴え、情緒が安定しているように思う。

その道は白く乾ききっていた。古い磨滅した石畳が、どこまでもつづいていた。ノルマンディ行の列車に乗り、地図で見ただけの全く見知らぬ駅におりてみたら、それは畠の中にぼつんと浮んでいる白い小さな駅だった。駅前にも後ろにも青い

畠が拡がり、何もない駅前広場の端にポプラが数本高々と聳えていた。

畠の中から道が一本、真直ぐ北に向ってのびている。私の前を同じ列車から降りてきたらしい中年の婦人が歩いていく。茶色の古風なスーツにびったりと軀をつつんでいる。これも古風なトランクをひとつさげているが、その色が真赤なのが、風景の中にあふれる光りという光りをその一点にしぼりつつているように鮮やかだった。スカートにつつまれた腰はひきしまり、のびた二本の足はしなやかで美しい。ブロンズは首筋できられ、その人が歩く度、ゆらゆらと捲毛が揺れる。人影といつてはその女ひとり、畠にも通りにも人っ子ひとり通っていない。真夏のフランスの片田舎でも、バカンスをとって人は誰もこの村にいないのだろう。道の両側の家々はみんな扉を重々しくとぎし、窓にはしっかりと鐵戸やカーテンが下っている。

やせた黒猫が一匹、いきなり家と家の間から飛びだしてきて、私の前を横ぎって走った。しなやかなその身のこなしは優雅で神秘的でさえあった。猫に見惚れていて目をあげたら、さっきの人はどこにもいなくなっていた。どこかの家の扉

の中に吸いこまれたか、そこらの露地の奥へ消えたのだらうけれど、その一瞬の消え方があまりに素速だったので、私の目の中には猫の黒と、女のトランクの赤がまだいりまじっている。ふっと、かき消えた女を思うと、駅からここまで歩いてきたのが夢であつたのかと思う。もしかしたら、私はひとりですつとこの死んだような白い村を歩いてきたのであつて、あの赤いトランクをさげた女は幻だつたのではないかとあやぶまれてきた。

道はやはり、白く乾ききつて、次第に強さを増す陽光をはねかえし、熱く石畳は燃え上ってくる。

突然、傍の緑色の扉の奥で、何か陶器の壊れるような音がした。ぎくつと立ち止りながらも、物の壊れる音のある以上、そこに人がいるのだと思ひ私は深い安堵にひたされる。すると私はあれほど、人の群を厭ひ、人の情に飽き、人の輪から逃れ出たいと望んで旅に出たくせに、やはり心の芯は人恋しさでひもじい思いをしていたのだらうか。

道はやはり白く乾ききり、ひたすら真夏の太陽の愛撫に身をゆだねている。道に生きて動いているのは、疲れた黄色い旅人の私と、私のつれの黒いやせた影法師だけであつた。

これは夢の町を歩いているのだと、私にもうひとりの私が囁いている。

海のように広い河であった。それで対岸の森や村や町のたたずまいは、遠い異国の岸辺のように見はるかせた。

河口の船つき場には建物もなく、むきだしの栈橋の背後は、監獄の塀のようにむやみに高い倉庫の灰色の壁にくぎられていた。

河面にももう黄昏の靄がただよいはじめ、無数の縮緬波がさざなみ立っている。遠い対岸から白い鳥影のように一艘の船が離れ、こちらへ向けて渡ってくる。

靄の底に、夕陽がゆっくり沈んでいくのが、まるくくりぬいたような朱さで見える。その色がひとつ赤いだけで、あとはすべて灰色と白のいりまじった色調で塗りつぶされている。

私はなぜそこに立っているのだろう。

遠い北の涯の名も知らない河口の船つき場。風は冷たく、刺すように痛い。私の前にも後ろにも横にも人はいない。私はあの河向うの町へ渡るつもりなのか、

河口から海へ出ていくつもりなのか、それとも、来た道を引きかえそうとしていくのか。

灰色の鳥が鋭い声をあげて、岸壁から飛びたち、私の顔を打つような近さでとび去っていく。いやな臭いが私の顔のあたりの空気に残る。

船が近づいてくる。白い思いがけないほど瀟洒な船だ。船の中にはおびただしい人がひしめいているのが見える。青い自転車がつまれている。黒塗りに金唐草の模様の乳母車もある。人々はじっと身動きもしないでいっせいに顔をこちらにむけている。縛られているようにおとなしい人々。河に風がおこり、船は木の葉のようにゆれる。すぐ風はおさまり、船はまた物静かに近づいてくる。

私は悲鳴を咽喉に凍りつかせる。人々の顔にすべて目も鼻も口もない。それなのに顔のすべてがこちらにむかって笑っているのだ。

外国のどこかの町の路上のカフェーの軒下だった。白と青と赤のんだら縞のテントが、路上にはりだした白いテーブルと椅子の上に影をつくっていた。私はそこで人を待っていた。

もう約束の時間はとうにすぎているのに、まだ人はあらわれない。歩いてくる

方向を見つめすぎ、私の目の中は白いオペラの館の建物の金色の獅子が、今にも立ち上ってこちらへ歩いてきそうに見えるほど疲れきっている。

私はおよそその人が歩いてくる気づかいのない方向に首をめぐらし、人が背後から私の肩に手をかけてくる瞬間を待つてみようとする。

いつかやはり、こうしてどこかで、長い長い間、人を待ちつづけていたことがあるように思い出す。すると、それはいつかではなく、いつでも、そうであったように思えてくる。人を待つこと、待ちつづけること、それが人が生きていくということかもしれない。

私は人を待たさなかったであろうか。待たす期待を与え、それを裏切りはしなかったか。いくつもの目が私に答えてくる。待たされた、裏切られたと。私はその目をふり払い、道をゆく人々を眺める。

ボーイが来て、コーヒーの皿を持ち去ろうとする。私はもう一杯コーヒーを頼み、また路上に目を移す。

人の流れは絶えることもなく目の前を流れていく。さまざまな国のさまざまな

旅人がそれぞれの孤独を抱きしめて、表面おだやかな表情で忙しく歩きつづけている。旅を歩いている人と、自分の町を歩いている人の歩みは一目で見わけることが出来る。旅人の足は、地を撫でるようにゆっくりふみしめられ、町の人の足は逃げるように地を掃いていく。

カフェーで旅人はぼんやり人や路上を眺め、町の人は気難しい顔で新聞をひろげている。

私はどの町へいっても、どの国へいっても、すぐそこに生れた時からいたような気持がして落ちついてしまうのはどうわけだろうか。生れついて放浪の性があるということは私の生年月日の星の運命だと易者に指摘されたことがある。それなら、いくら家を建て、栖を定めても私の放浪の星が消えないかぎり、私の旅を憶れる心は消えることはないであろう。もし死後の世界があれば、やはりそこにも旅をしたい道があるのかもしれない。いや、死後の世界へ行くことこそ、未知の国への憧れと冒険にみちた旅そのものであるかもしれない。

亡くなった森田たまさんが、死後発見された遺言に、

「これから未知の国へ行つてまいります」

ということばで死を語られていたのを思いだす。

旅は恋と似ているといつか私は書いたことがある。未知のものへの憧れと情熱が同じ性質だと思えたからである。それと同時に、このごろ、私は旅は死にも通じているように思えてきた。還らぬ旅に出るということばを考え出したのはどこの詩人なのだろう。詩人といえ、詩を書く人で旅を愛さない人がいるののだろうか。いや、旅を好む人はすべて詩人だといっていいのかもしれない。詩を書く人でも真正の詩人でない人があるように、詩を書かない旅人の中に、もしかしたら真の詩心を抱きつづけている人がいるのかもしれない。

終つひの栖すみかということばがある。私は夢でよく、自分は今どこに寝ているのだろうとあたりを見廻している。必ず寝る場所が自分の家の自分の寝室だと思いこんでいないしるしのようで、われながらおかしくなる。

私はまるで二年に一度くらいの割合でめまぐるしく引越をしている。自分でも年の数くらい引越したとよく冗談をいう。自分で土地を買い家を建てる気はまだ一度もなかったことがないのは、どうせまた、そこに棲みつかないだろうと思うからである。

今も京都と東京に家を持ち、あっちこっちへいく生活をつづけ、一向に落ちつかない。

京都にいる時は、仕事場の東京こそ自分の本当の場所だと思い、東京にいては、京都へ早く帰り、畳の上で眠りたいと思う。

どっちにいても私はもうひとつの場所へ帰るということばを使うところをみると、私の中ではどっちでも、棲いはいいいわけなのであろう。

それでも、東京に二週間もいて、朝も晩も机にしばらくつけられた暮しをしていると、手当たり次第本を投げつけたような烈しい気持で、京都の空の色や山のたえずまいが恋しくなることがある。

もう、そんなにいることが少いなら、京都の家は不経済だからおたたまやすと、京都の人はいう。しかし私は今の家をたたんでも、またおそらく、京都に家をつけるであろう。今の日本で、土や風や水が、そのままの姿で生きている都会は、京都をおいてどこがあるだろうか。高山、松江、金沢などを思い描く。しかし私には遠すぎて、そこで住む気にはなれない。やはり京都が美しいし、便利だし、私には都合のいい町のように思われる。

京都の人は他所者に冷たいというが、私だけは京都の人の冷たさを味わわされ